

報告 1：徐涛（九州大学・研究員）

「中国現代思想における新たな世界像の模索—評論誌『読書』（1990～2010）を中心に」

本報告は、大国化する中国のアイデンティティ模索に対する関心から、1990年代以降における中国現代思想の変容に焦点を当て、知識人の間で広く読まれている思想評論誌『読書』（1990～2010）の分析を通じて、中国の知識人、なかでも「批判的知識人」と呼ばれるグループが、いかに新しい世界像の構築を模索していたのかを考察する。

具体的には、まず、天安門事件をはじめ、冷戦の終結、ソ連の崩壊、市場経済への移行にともなう中国国内矛盾の高まりといった国内外状況の急激な変化が続くなか、1980年代の「啓蒙知識人」陣営が分化・分裂し、民族主義を旗印とする知識人に続き、「新左派」と呼ばれるグループが台頭してきたことを確認する。とりわけ、市場イデオロギー・新自由主義を批判するだけでなく、中国現代思想における「中国—西洋」／「伝統—近代」の認識枠組み自体を問い直し、中国思想界における欧米中心主義的知のあり方も反省・批判する批判的知識人の登場は重要であった。

続いて、批判的知識人が『読書』を陣地に、中国現代思想における脱欧米中心主義的世界像の構築を模索していたことに注目する。新たな知の世界像の構築を求めて、意識的にアジアをはじめとする非欧米地域に目を向けるようになったのはまさに『読書』の編集長を務める汪暉をはじめとする批判的知識人であった。

さらに、1990年代後半からみられた日本におけるネオ・ナショナリズムの台頭と、2000年代における歴史認識問題をめぐる日中関係の悪化が、『読書』に「東アジアの病理」解剖を中心とする思想的視座を登場させたことを指摘する。

最後に、本報告の考察が大国化する中国のアイデンティティ模索を理解するうえでの意義と今後の課題についても言及したい。